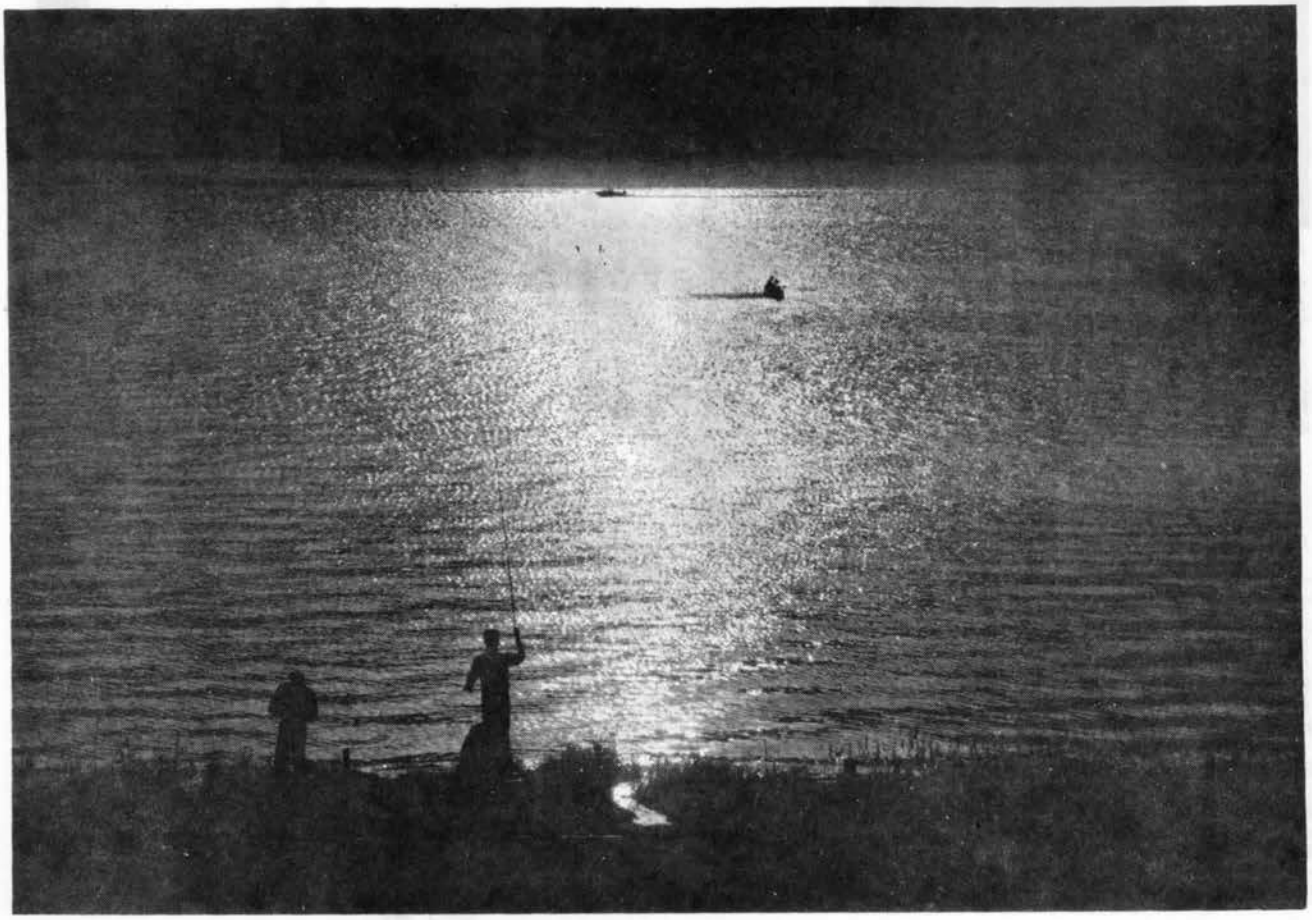
毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第15巻　第8号　1970年8月25日　大町山岳博物館



撮影　山本携華

仁科三湖とため池

「大衆レジャー時代」「マス・レジャー時代」などなどのかけ声と並行し、北ア山麓の仁科三湖へ訪れる人々の数は、年を追って増加の傾向を示している。

それに伴って湖畔には別荘・会社・学校など各種の夏季施設や、地元業者による観光客受入れのための諸施設が新設あるいは改増築され、湖畔の景観は次第に変容している。

多数の観光客の来訪によって地元の観光産業が発展することは、その限りにおいて喜ばしいことである。しかし、この傾向は必ずしも手ばなしで喜んでおられるものでもないだろう。

なぜなら、十数年前、「山と高原と湖」などのうたい文句で大々的に観光開発を進め、多数の観光客を迎え入れたたて科高原の白樺湖や志賀高原の蓮池をはじめとした多くの湖沼は周辺の旅館群から放出される汚水や、観光客の残して行くごみによって清らかな空気・水・緑の山々は観光対象物としての価値を失いつつある。

また、観光と産業の都市として洋々たる前途を誇り、「東洋のスイス」とまで宣伝された諏訪湖の場合、周囲から放流される汚水や工場廃水によって見る影もなく汚染され、その状態は年ごとに加速度を加えている。もともと水深七㍍前後の浅い湖水であり、湖の周辺に分布する都市や村落の発展に伴って汚染が進行し、今日では騒音、雑踏、汚濁の湖沼となり、多少の措置ではどうにもならない現況にあるという。

幸いにも仁科三湖はまだはだ汚染が進んでいない。このままの姿で、美しい景色と清らかな水で、いつまでも人々に親しまれ、汚水や大腸菌の心配をすることなしに思う存分泳ぎのできる湖水として、永遠に観光的生命が維持される湖水であることを願う。（山猿）

木崎湖

北葛沢遡行記録

山口一也

昭和四十四年九月、これを芯身づたいに突破してみようと試みた。中間点附近は一キロ程の河原帯で、発電所関係の作業小屋や山の神なども祭られており、途中で人気を感じられる唯一の場所である。二度の偵察で水量、水温、エスケープルート、ゴムボート使用の可否（今回の遡行では使わなかった）などを調べた後決行した。

北葛沢の位置

北アルプス後立山連峯の内、蓮華岳と北葛岳を結ぶ稜線の間へ、東面から食い込んでいる沢が北葛沢である。

この沢は後立山の玄関口にあたる大町の市街地からちょうど真西の辺に見る事ができる残雪は夏遅くまであって水量が豊富であり、その水は中間点附近から導びかれて発電用に利用されている。昔からイワナ、カモシカ、サル、クマなどが多く生息し、釣人や猟師の出入が多かったため、左右両岸とも中間点附近まで巻道がつけられている。

沢のツメは海抜二千三百メートルで、隣にある有名な針ノ木峠より低い位置にあるが、高瀬川との出合から三キロ程上流の中間点まで続くゴルジュ帯と、発電用取入口よりゴーロ帯までぬける上部ゴルジュ帯の芯身は、これまでほとんど人を寄せつけず、その全貌はあまり知られていなかった。——

滝〔F10約6m（下）とF11約4m（上）〕

遡行の日記

九日十三日　晴

出合でバスから降り早速渡渉開始、冷たい水が気持よい。十分程で着いたエン堤を過ると広い川原が続く。白い砂とそこを蛇行する美しいせせらぎからは、この谷の奥の厳しさなどみじんも感じる事はできない。出合から五十分程で一ノ沢を右に過ぎると沢は急に狭まり、いよいよここから下部ゴルジュ帯に入る。

第一の難関F1は七メートル程で良く発達した釜は左岸の洞くつをつくっている。両岸は釜にかぶさり、水煙とごう音が満ちてものすごい。左岸洞くつの中を渡渉し、落ちる流れに沿いハーケンを二本ビレーして左岸落口へ上る。腰までの渡渉とシャワーですでに全身ずぶぬれになる

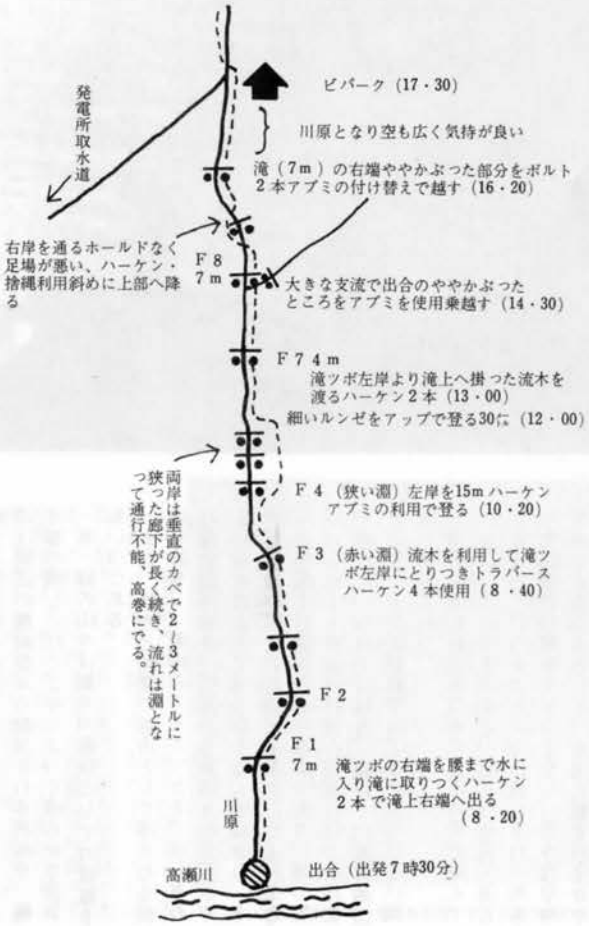
落口から右に曲るとすぐ三メートル程のF2がある。が容易である少し広くなった処を二百メートル程でF3の淵に出る。両岸は赤味を帯びた岩で、左岸水面上四メートルにバンドが滝まで続いている。流木を立ててはしごに利用し、ハーケンを一本きかせてバンドへ入り、滝壺上をハーケン二本を横に連打して落口へトラバースする。ここより両岸の垂直の壁は二～三メートルに狭まり全くの廊下となる。

一ピッチ程でF4の淵に出る。F3から続く極端なゴルジュは、F4の上に見えるF5から更に上部にかけて続き、右へ曲りながらその奥は見えなくなっている。異様な雰囲気のする場所であり、長く深い淵は通行困難のため、我々は淵の手前の左岸垂直の壁を十五メートル程、ハーケン四本とアブミ利用で不安定な草付へ出て、ブッシュ帯を灌木につかまりながらトラバースし、細いルンゼをF6の上へアブザイレンで下る。川底はわずかに広がるが、両岸は相変らずのゴルジュが続く。

一ピッチで大きな釜を持つ四メートル程のF7へ出る。左岸へハーケンを打ち、滝壺上を斜めに掛った流木へ下り、ザイルで確保しながら右岸へ渡って落口へ出る。足下の噴流がものすごい。

小滝を一つ二つ越すと二つの滝が左右から落ち込む二ノ沢の出合に着く。水量は本流とほとんど同じ位であり、二ノ沢側の滝は二～三段に別れ二十メートル位はあろう。本流側は七メートル位で、我々は中間に出つ張ったかぶりぎみの岩をバンド沿いに登り、張り出した木の根につかまり滝上へ出た。

小滝を越すとF8へ出る。相変らず蛇行する流れの両岸には懸崖が続くが、F1からすでに七時間近くもたつので、そろそろビバークの予定地である中間附近の川原帯へ出るものと期待しながら小滝一つを右岸より巻く。釜の手前右岸の崩落部を十五メートル程登り、滝を足下に見ながら草付をトラバースし、滝へ突き出した岩上へ出て、更にハーケンをきかせて斜めに川原上へ降りる。



一ピッチ進むと七㍍程の滝に出る。やや巾のある右端上四㍍程のバンドへ身を入れる。上部はリスのないオーバーハングの一枚岩でボルトを二本連打しアブミを使って登り越す二ピッチ程進むと川原は徐々に広がり、ようやく中間点附近の川原へ着いた事を知る。朝F1へ取り付いてからおよそ八時間。長いトンネルをようやく出たような気持で空を眺める春の豪雨で荒れた川原を三十分程歩くと発電所用の作業小屋へ着きビバークする。

九月十四日　晴

冷たい渡渉はいやなので朝少し遅く出発する。ここよりしばらく上流の発電用取入口までは道がある。よく手入れの行きとどいた道を、大きな滝を三つ程越すと取入口へ出る。しばらく川原が続いた後巾の広いF10の下へ出る。石壁をハーケン三本程で登り、滝上へ出ようとしたがうまく降りられず、そのまま不安定な岩棚をへつった後十㍍程のアブザイレンでF1の上へ降りる。しばらく進むと川巾は狭まり左岸よりV字状の落口の手前約三㍍程まで伸びている大きな流木を渡り、苦労の末右岸へボルト一本を打ち込みアブミを足場に落口へ上る。水中のアンダーホールドと、水圧のかかる足場で微妙なバランスが必要である。

小滝や滑滝を快適に遡行すると釜の大きなF12に出る。左壁はかぶっているが右壁は段々状の岩で、そこを五十㍍程登り、草付を十㍍降りると滝上の岩へ出る。更にすぐあるF13の左壁の凹地に身を入れしぶきをあびながら落口へへつり上る。

小滝を越すと五㍍程の滝上に大滝が見えるちょうどくの字に折れた滑めぎみの滝で四㍍程あろう。右端が登れそうだが落口に出る最後の四～五㍍は人工登はんになりそうである。時間もかかりそうなので手前から右壁に取り付き、足下に大滝を見やりながらブッシュ帯をトラバースし、小滝の上へ落ち込む岩溝の中をアップザイレンで下る。狭いゴルジュ帯を出るとやや開けた川原となる。滑滝の気持よい遡行はこの沢ではじめてであろう。

そして川原は急に前方で行き止りになる。流れはほぼ直角に左折しているらしい、曲り角へ行くと流れは極端に狭い岩溝の中に入り込んで三段の滝となっている。一番下が三十㍍位、上の二つが十㍍位であろうちよっと手がつけられない。

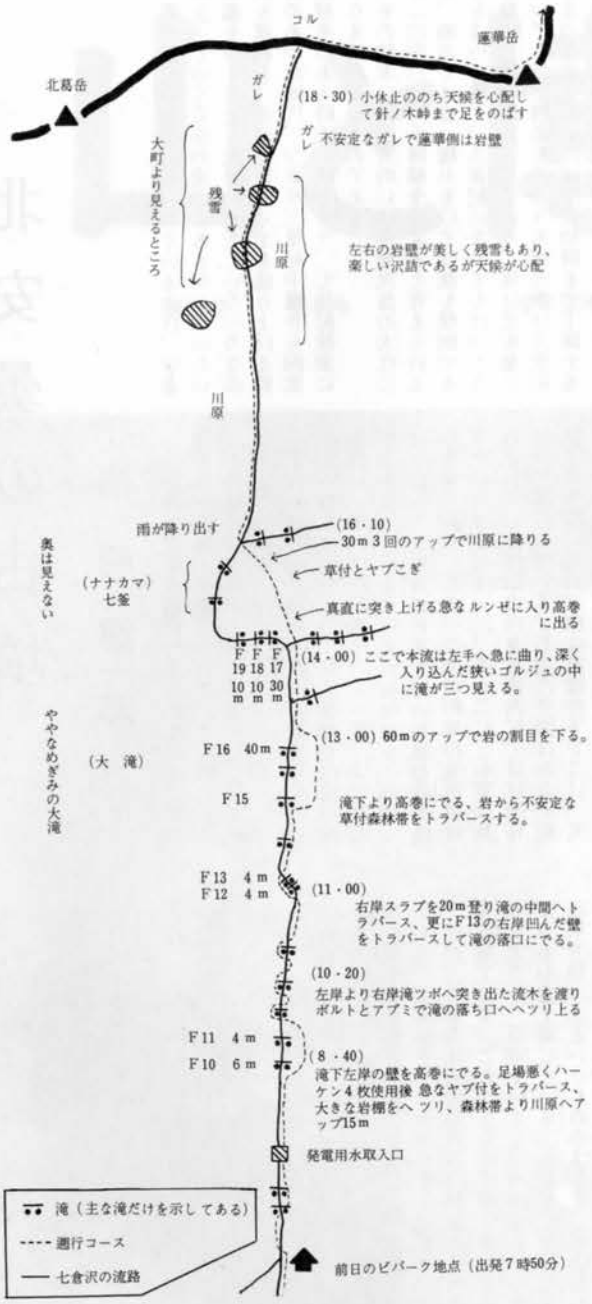
下山した後地元の猟師に聞くと、この開けた処が「臼の目」と呼ばれている処であるらしく、「北葛の奥に大きな〝クボッタミ〟（凹地）がある」などの話と合せ、上部から見るとちようどそんな様子に見える事だろうと感じた。また、左折して入り込んだ岩溝が「七釜」（ナナカマ）と呼ばれている処である事は容易に判断する事が出来る。

直角に左折した本流を左手に、正面へ突き上げている涸沢へルートを取る。ガラガラとくずれそうな小ルンゼを三百㍍程登るとブッシュ帯になり、七釜へ落ち込む蓮華側の小尾根に出る。真西に北葛沢の上部ゴーロ帯が開け、足下の七釜へ吸い込まれる様に消えている。右手蓮華側の大きな岩壁と小沢の滝がまことに美しい。

本流と小沢が消えている足下に向って下れば「七釜」の上部へ降りられる事がわかる。小やぶをかきわけて三十㍍のアブザイレン三回の末、合流点のゴーロ帯へ降りる。小雨が降り出したがほぼゴルジュ帯を抜け出した事を感じつつ稜線へ急ぐ。

小滝を一つ二つ越し、残雪の崩れ場やスノブリッヂの下をくぐると急なガレ場となり、右側からの落石を気にしつつ小雨の中をコルに着いたのは六時半であった。天気を心配して夜道を針ノ木峠までとばし、ツエルトを被った。

（大町山の会会員）



ビレー＝確保。身体をザイルで適当な岩角や岩に打込んだ「ハーケン」に結びつけ、滑落に備えること。

アブザイレン＝懸垂下降。ザイルを体にからませその摩擦によりずるずる降りる。

ゴルジュ＝両岸の岩壁がひどく迫り合った深い峡谷

ゴーロ＝河原のように大小無数の岩石が地面をおおっている区域。

アブミ＝長さ一～二㍍のザイル二本と木またはアルミ板を使った一種の縄梯子。

バンド＝岩壁の中段にある岩棚。登高の中継場所やトラバース・ルートとして用いられる

ボルト＝埋込みボルト。「ハーケン」の使えない岩壁に穴をあけ埋め込む人工登はん用のボルト。

ヘツリ＝山の急斜面や岩壁を横づたいにわたることをいう。

ルンゼ＝山稜または岩壁に水の浸蝕作用で入りくんだ急峻な岩溝のこと。

リス＝岩のせまい割目のことをいい「ハーケン」を打つのに利用できる。

アンダーホールド＝ホールドは手がかりとする岩の小突起や窪みのこと、下方の手がかりをすくうようにして持ち、身を支える場合のホールド。

コル＝鞍部。峠。

ブッシュ＝ヤブのこと。

スノーブリッヂ＝雪渓の亀裂（クレバス）の上に橋を架けたように両岸へまたがった雪をいう。

北安曇の古墳

篠崎健一郎

考古学で古墳時代といっているのは、学者によっていくらかの違いはあるが、だいたい墳墓をつくるとき死者に副えていろいろな品物を埋納し、その上に高く土を盛り上げる習慣のあった時代、つまり三世紀中葉から四世紀前半のある時点にはじまり、七世紀後葉にいたる時代をいうのである。

その終末は、公式的には孝徳天皇の大化二年（六四六年）の薄葬令によると考えられるが、地方では強い権力を以て伝統を規制できたとはいい難く、八世紀になってもけっこう多数の古墳が築造されており、現に北安曇においてもいま残るもののうち相当数は八世紀ひよっとすると中には平安初期まで下降するものがあるのではないかと考えている。

木崎湖周辺の尻無古墳（積石塚）

北安曇地方で古墳がつくられたのは、ざっと百年か百数十年間くらいで、その間に三つほどの型式のものが、およそ並行して行なわれたようである。

その一つは南安曇郡の西の山麓地方に中心をもつ群集墳の型式で、北安曇郡では松川村鼠穴に一基、池田町堀の内に一基、ほぼ完好なのが残っている。いずれもマウンド内部一ぱいに大きな横穴式石室を築いた典型的な後期古墳である。その一つ池田町鬼の釜古墳はマウンドの直径十一㍍、高さ二㍍、石室は築造されている尾根の向きと直角に、ほぼ南に向って開口している。石室の平面はおよそ矩形で長さ四、八㍍、巾は奥壁の下で二㍍。天井の高さは二、一㍍で、側壁はこころもちアーチ状に積み上げてある。マウンドの高さと天井の高さがほとんど同じなのはおかしいが、これは石室をおよそ六〇㌢㍍堀り下げてあるので、その差し引きが天井の厚さということになる。使ってある石は、ほとんど花崗岩の円礫で、これは高瀬川から運び上げたものであろうが、奥壁及び天井の巨石数個は大町より上流から運んだものかと思う。こういう型式の古墳は石室入口のかんたんな閉塞施設を除くことにより、複数の死者を順次葬ることのできる家族墓である。

その二の型式は内部に埋葬施設を作らず直接木棺を埋納したもので、大町市三日町、白馬村神城にあるものである。調べてみると木棺も遺体も既に土に帰し、ごくわずかの副葬品が発見されるにすぎない。白馬村の屏風塚は径二十数㍍の堂々たる円墳であったけれども、つい副葬品を見なかったそうである。

その三の型式は木崎湖周辺に数基みられる積石塚である。これは土を以てマウンドを築くことなく、石礫を以てし、内には小さいながらも石室を蔵している。土がないから代りに石で作ったというものではなく、ぜひ石を用いてそうしなくてはならぬという信仰的な理由があるのである。これは古代朝鮮半島北部の高句麗の制であるという。古代朝鮮からの帰化人が、信濃国の各地にも配置され、あるいは特殊の技能を以て働き、あるいは開拓にあたった事実があり、松本市郊外のものが須々岐の姓を、東筑坂井村のものが安坂の姓を賜わった例などは、文献と考古学の所見とが一致する好例であるけれども、木崎湖ふきんのものも、断定できぬまでもかれら一派の遺したものである公算が大きい。

以上のような三つの形態の古墳が、ほぼ時代を同じくして、比較的近接した地域にわずかずつながら分布していることが、北安曇の特色となっているが、これらは発達あるいは衰退の姿を示すのではなく、また築造した氏族にさほどの経済力の差があったと思われない。この形態の差は氏族のもつ葬制のちがいそれぞれの氏族の出自に、大きな差異があった故と考えられる。

木崎湖周辺の積石塚についてはさきにのべたが、池田町や松川村の立派な石室をもつ古墳を残したものは誰であったろうか。ここで思い起すのは、奈良正倉院の調布墨書銘である。これには天平宝字八年安曇郡前科郷戸主安曇部真羊、郡司主帳従七位上安曇部百鳥とあり、池田以前の地が安曇氏の勢力圏であったことを物語る。従ってこれらの古墳はまず安曇氏関係者のものであろうことは想像がつく。松川村のものもすぐ南につづいて有明古墳群があることから、その一つであると考えられよう。

池田町堀の内　鬼の釜古墳　下は石室内部を示す

最後に三日町や神城の無石室の古墳であるけれども、これを築造した氏族についてはいまのところ、なにもわかって居らず、今後の研究にまつよりしかたがない。ただ三日町の山の神遺跡から出土した土師器の底部に「奉」の墨書銘があり、古墳築造より時代は若干下降するにしても、氏族としてのつながりはあるものと考えてよく、手がかりの一つになりはしないかと思われる。

（大町市立常盤小学校）

山と博物館第15巻第8号
一九七〇年八月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町　大糸タイムス印刷部
定価　年額三〇〇円（送料共）（切手不可）